

松波むかし語り ここに生き続けて

その28

今回のお客様

元町会副会長で現千葉市薬業会会長の

矢島 英輔 さん 66歳 3丁目

“松波を出て行った若者を呼び戻す魅力がほしいですね！”



「医療分業」と言って、医者が薬を出すのを止めて、薬は薬店が出すようになりましたね。その結果、“門前型”と呼んでいます。薬剤師は医者について仕事をする形が増えました。一方で薬店の多くがチェーン店化して、二代・三代と続く薬屋が少なくなり、経営者の半分以上は薬剤師でないという時代になりました。薬の業界に大きな再編の波が次々押し寄せている大きな原因は、厚生省(現在の厚生労働省)が進めてきた「医療費削減とそのため薬代削減」にあると矢島さんは言います。「しかも、医療が35兆円産業と言われますが、いまや栄養を補助するためのサプリメントが1兆円を超える産業に成長しているのに対して、薬は6000億円、しかもその多くが量販店で売られているという時代です」。薬の業界を大波が襲ってきているんですね。



昭和31年頃の矢島薬局



現在の矢島薬局

そんな話を矢島さんが熱っぽく語るのは、矢島さんが千葉市薬業会の会長を務めるからでしょうか。矢島さんは、戦時中、衛生兵だったお父さんが薬種商の資格を取って昭和25年、千葉商前に矢島薬局を開いたあとを継ぎました。しかし、学生運動にもまれた大学時代、そして薬剤師の資格を取ったあとも、一時県庁に就職するなど、これまでの道筋はすんなり進んできたわけではないようです。「若い頃は地元に関心がなかったですから」—その矢島さんが、矢島薬局を継いでからは、轟中学校PTA会長や、10年ほど携わった町会では副会長も務めるほど、業界と地域の活動の二足のわらじを履いて忙しい毎日をご過ごしてきました。

「夏祭りの子ども神輿もそうですが、私たちの親世代が子どもたちに何かしたいと奮闘してきたことは理解してましたからね」。そしてまた、「信頼関係をつくるにはむずかしい時代ですが、松波を出て行った若者を呼び戻すには、地域をつなぐ魅力がほしい。その意味で、夏祭りの存在は大きい」とも言います。

「医者のカゲに隠れていた薬屋が直接、患者から責任を問われる時代」だそうですが、薬業界と地域の二足のわらじを履き続ける矢島さんの奮闘が続きます。

